



俺の
赤ずきん

狼のお嫁さんになるって、言っただろ？

あの時の
約束
もらいにきた

【体験版】

赤ずきんと狼の十年愛

【第一章 赤ずきんと、森の子狼】

むかしむかし――

ある森の中に、ミアという名の可愛い小さな女の子がおりました。

少女は、赤い頭巾をかぶっていたので、『赤ずきん』とよばれておりました。

ある日のこと、赤ずきんは川岸で立ち尽くしておりました。

夜のあいだに降り続いた雨が、森を流れる川をいつもの何倍にも膨らませていたからです。

「困ったなあ……」

手には、小さな籠。師匠に頼まれた薬草を摘みに来た帰りだった。けれど、その途中で見つけてしまったのだ。

川の向こう岸、赤色の大きく美しい花に囲まれている一本の木。雨に濡れたその木の枝に、実っているもの。

金色の木の实。

「……あれ」

少女は目を輝かせた。

金色の木の实。

願いを叶える力があるという、とても珍しい木の实だ。

師匠がずっと探していた。

「どうしよう……」

少女は川を見た。

激しい流れ。渡れるような橋はないけれど…

「お師匠様のお使いだもん」

少女は小さく頷いた。そして、川岸に立ってかけられていた古い梯子へ足をかける。

一歩。

3 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

もう一歩。

——ぎし。

「……大丈夫」

さらに一歩

——ぎしつ。

その瞬間。

ぱきん、と嫌な音がした。

「きやつ……!!」

梯子が折れた。

身体が傾く。足元から、濁流が迫ってきた。

——落ちる。

そう思った瞬間——

ぐいつ。

誰かに腕を掴まれた。

「――馬鹿！」

どさつ。

少女の身体が川岸へ転がる。

「……うう」

顔を上げる。

そこにいたのは、一人の少年だった。

人間の子どもと変わらない姿。けれど、頭には狼の耳。

そして――金色の瞳。

太陽みたいのに、きらきらと光っている。

少女は、思わず息を呑んだ。

「……きれい」

「は？」

少年が目を丸くする。

耳が、ぴくりと動いた。

5 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

「目。…あなたの目、すごくきれい」

少女は吸い寄せられるように、その瞳を覗き込んだ。
近づく、金色の瞳の中に赤い頭巾が小さく映った。
その瞬間。

金色の瞳が、眩しそうに細められた。

少年は、慌てて顔を背ける。

「な、なんだよ……」

少年は困ったように眉を寄せる。

「おまえ……危ないだろ」

「……？」

「こんなところに落ちたら、死ぬぞ」

少女は川を見る。

それから、川の向こうを見る。

「でも……」

「なんだよ」

「あの木の実を、とらないと」

少女が指を差した。

「お師匠様のお使いなの」

少年は川の向こうに視線を投げて少女に告げた。

「別のところ探せよ」

「だめなの」

「なんで」

「この木の実は、ここにしかないから」

少女の声が、少しだけ寂しそうになる。

「願いを叶える力がある、特別な木の実なんだって」

「……願い？」

「うん」

少女は頷いた。

「だから、どうしても必要なの」

少年は黙った。

少女を見る。川の向こうを見る。そして、もう一度少女を見る。

「……はあ」

小さく息を吐いた。

「んじゃ、俺がとつてきてやる」

「え？」

少女が目丸くする。

「いいの？」

「おまえじゃ無理だろ」

そう言つて、少女が止める間もなく、少年は川岸を蹴った。

水面から突き出した岩へ。

そこから、倒れた木の幹へ。

まるで獣のように、濁流の上を軽々と渡っていく。

「すごい……」

やがて川の向こうへ辿り着いた。

すばやく金色の木の実をもぎ取る。

けれど戻ってくる途中、赤い花の棘に腕を引っかけた。

「……っ」

赤い傷が走る。

「あっ！怪我した！」

戻ってきた少年に、少女が駆け寄る。

「これくらい、なんともない」

心配する少女に、少年はそう言って、木の実を差し出した。

「ほら」

金色の木の実が、陽の光を受けてきらきらと輝いている。

まるで、目のまえの少年の瞳みたいだった。

「ありがとう……!!」

少女は両手で受け取った。

「……綺麗」

少女は嬉しそうに笑った。

「本当にありがとう！」

その笑顔を見て、少年は固まった。

「ねえ」

「ん？」

「ごめんなさい。あのきれいなお花に棘があるなんて知らなくて、あなたに危険な思いをさせちゃって」

「俺は平気だ。……雨が止んでも、お前は絶対あそこには行くなよ」

「なんで？」

「あの赤い花、見てみろ」

少年が顎で、川向こうを示した。

雨に濡れた大きな赤い花が、金色の木の実を囲むように咲いている。

「あれは喰い花だ」

「くいばな？」

「甘い匂いで獲物を誘うんだ。近づいたら頭がぼうつとして、逃げられなくなる」

「……虫を食べるの？」

「虫だけじゃねえよ」

「え？」

「兎も鹿も——人間も喰う」

「……！」

「だから近寄るな。ぱくりとやられるぞ」

怖いことを言っているくせに、少年の金色の目はひどく真剣だった。

「何かお礼をさせてちょうだい？」

「お礼？」

「うん。助けてもらったから」

少年は少し考えた。

それから、少しだけ目を細める。

「……じゃあ、いつか欲しいものができたら、おまえからもらう」

「いいよ！」

「……ほんとに？」

「うん。約束！」

少女は何の迷いもなく笑った。

少年は、その顔をしばらく見つめていた。

「ねえ。あなた、お名前は？」

「……銀」

「銀ちゃん！」

「ちゃん付けすんな」

「銀ちゃん！」

「……聞いてんのかよ」

少女は初めての友達に、嬉しそうに笑った。

「また森で会ったら、ちゃんと俺に声をかけろ」

「うん！ 約束する！」

そして小指を差し出す。

少年は少し戸惑ったあと、その小指に自分の指を絡めた。

「……約束だからな」

「うん！」

金色の木の実が、二人の間でキラキラと光を放っている。



「銀ちゃん！」

「走るな。転ぶぞ」

「大丈夫！」

「お前的大丈夫は信用できねえんだよ」

13 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

「きやつ」

「ほら見ろ！」

銀はいつも、赤ずきんの少し前を歩いていました

赤ずきんが危ないことをすれば怒って。

転べば助け起こして。

高い木の上の実を欲しがれば、呆れながら取ってくれました。

「銀ちゃん、あれ！」

「自分で取れ」

「届かないの」

「知らねえよ」

「銀ちゃん」

「……………」

「銀ちゃん？」

「……待ってろ」

そう言つて、結局取ってくれる。

赤ずきんは、そんな銀が大好きでした。

泣いているときには、いつの間にか木の陰に銀がいる。

何も言わず、少し離れたところに座っている。

「そんなところにいたの？　話しかけてくれればよかったのに」

「お前が泣き止むまで待つてる」

「どうして？」

「……知らない」

崖の上にしか生えない薬草の話をした翌日には、家の前にその薬草が置いてある。

花畑で花を摘んでいるときには、いつの間にか隣にいる。

そして、ある日。

「これ」

銀が花束を差し出した。

「私に？」

「他に誰がいるんだよ」

赤ずきんは笑った。

「ありがとう、銀ちゃん」

花束を胸に抱える

銀は、少しだけ目を逸らした。

その様子がおかしくて、赤ずきんはまた笑った。

遊び疲れた二人は、そのまま花畑で並んで寝転がった。

森の風は心地よく、木漏れ日は暖かい。

うとうととまどろみながら、赤ずきんは無邪気に言った。

「わたし、大きくなったら銀ちゃんのお嫁さんになる」

「……は？」

「銀ちゃんのお嫁さん」

「お前、嫁って何か分かってんのか？」

「ずっと一緒にいる人でしょう？」

「……まあ」

「じゃあ銀ちゃんがいい」

「……………」

「だめ？」

「……別に」

「ほんと？」

「お前が言っただからな」

「うん！」

「あとで、やっぱりなして言うなよ」

「言わないよ」

「……約束だからな」

赤ずきんは嬉しそうに笑って、そのまま目を閉じた。

しばらくすると、小さな寝息が聞こえ始める。

銀は眠った赤ずきんを見つめた。

17 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

そして、誰もいないことを確かめるように森を見回してから、ようやく隣で目を閉じた。

* * *

それからしばらくした、ある日のこと。

「……森を出す」

「え？」

「軍に行く」

「ぐん？」

「森の外だ」

「いつ帰ってくるの？」

「……分からない」

「明日？」

「無理だ」

「じゃあ、三日後？」

「……無理」

「一週間？」

「赤ずきん」

「……………」

ようやく少女にも分かった。

銀ちゃんは、しばらく帰ってこないのだ。

「……やだ」

声が震えた。

「銀ちゃん、行っちゃうの？」

「……ああ」

「やだよ」

ぼろり、と涙が落ちる。

銀は眉を寄せた。

「泣くなよ」

「だって……」

「……赤ずきん」

困ったように名前を呼んでから、銀は首元へ手をやった。

「これ」

「……なに？」

差し出されたのは、細い革紐だった。

その先には、陽の光を受けて輝く銀色の毛が編み込まれている。

「これ、銀ちゃんの毛？」

「そうだ」

「なんで？」

「俺がない間も、絶対外すな」

「どうして？」

「……お前は危なっかしいから」

赤ずきんは涙を拭いながら、お守りを両手で包んだ。

「これがあつたら、銀ちゃんみたいに守ってくれる？」

「……まあ、そんなところだ」

そう答えてから、銀は少しだけ目を細めた。

「それから」

「なあに？」

「お前は、もう少し他人を疑え」

「どうして？ お師匠様は外は危険だと言ってたけど、この森にはいい人しかいないよ」

「……それが危ないんだよ」

「？」

「いいか。いくら良い人そうに見えても、狼についていくなよ」

「なんで？」

「お前は……獣人がどんな生き物か、まだ知らないんだ」

赤ずきんは少し考えて、こくんと頷いた。

「……分かった」

それから、ふと思いついたように首を傾げる。

「じゃあ、狼じゃなかったら？」

「……………」

銀の耳が、ぴくりと動いた。

「……男も」

「男の人？」

「ああ」

「どうして？」

「……お前は、何も知らなすぎる」

銀は顔を逸らした。

赤ずきんは不思議そうに見つめたけれど、やがて素直に笑った。

「分かった。気をつけるね」

「……絶対だぞ」

「うん！」

そして、少しだけ間を置いて。

「……銀ちゃん」

「ん？」

「帰ってくる？」

銀は赤ずきんを見た。

「……ああ」

「ほんと？」

「帰ってくる」

「約束？」

「ああ」

金色の瞳が、まっすぐ赤ずきんを見つめる。

「約束だ」

(中略)

それから、銀は一年に一度、森へ帰ってきた。

春だった年もある。

雪の残る冬だった年もある。

帰ってくる時期は決まっていなかったけれど、銀は必ず赤ずきんのところへやって来た。

「銀ちゃん！」

「走るな」

二年目も。

「銀ちゃん、おかえり！」

「……また背、伸びたか？」

「ほんと？」

三年目も。

「銀ちゃん！」

「赤ずきん」

四年目には、赤ずきんが見上げなければ金色の瞳が見えなくなった。

「……銀ちゃん、また大きくなった？」

「お前が小さいんだろ」

「そんなことないもん」

「去年も同じこと言ってたぞ」

少年だった身体には、いつしか黒い軍服がよく似合うようになった。

それでも赤ずきんにとっては、ずっと銀ちゃんだった。

帰ってくれば嬉しくて、いつも駆け寄った。

銀もまた、そんな赤ずきんを当たり前のように受け止めた。

そして帰る前には、決まって赤ずきんの首元に触れた。

「ちゃんと持つてるな」

「もちろん！ 銀ちゃんがくれた大切なものだもの」

「……そうか」

銀は少しだけ目を細めると、赤ずきんの頭に手を置いた。

「いい子だ」

「わっ」

そのまま、わしやわしやと頭巾をかき回される。

「銀ちゃん！　ぐちゃぐちゃになる！」

「知るか」

「もう！」

赤ずきんは知らなかった。

獣人の嗅覚が、人間よりずっと鋭いことを。

ましてや銀が、一年に一度帰るたび、何を確かめていたのかなど――知るはずもなかった。

それから一年が経った。

「銀ちゃん！」

森の向こうに見慣れた銀色を見つけて、赤ずきんは駆け出した。

「おかえり！」

いつものように、その胸へ飛び込む。

「……っ」

銀は赤ずきんを受け止めた。

けれど。

「……………」

なぜか、そのまま動かなかった。

「銀ちゃん？」

「……赤ずきん」

「なあに？」

名前を呼ばれて顔を上げる。

金色の瞳が、じっと自分を見ていた。

「……？」

赤ずきんが首を傾げると、銀はふいに目を逸らした。

27 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

そして、赤ずきんの肩に手を置く。

いつもなら、頭巾をぐしゃぐしゃにされるところなのに。

その日は違った。

銀はそつと、赤ずきんを自分から離れた。

「……銀ちゃん？」

「なんです？」

「……………」

赤ずきんは瞬きをした。

「銀ちゃん、変」

「何がです？」

「ほら！ それ！」

「？」

「喋り方！」

「ああ」

銀は何でもないことのように笑った。

「向こうじゃ、こうなんですよ」

「変なの」

「そうですか？」

「うん。銀ちゃんじゃないみたい」

「……………」

「前みたいに喋ってよ」

銀はしばらく赤ずきんを見ていた。

それから、小さく息を吐く。

「……面倒くせえな」

「あ！」

赤ずきんの顔がぱつと明るくなった。

「銀ちゃんだ！」

「お前な……」

呆れたような声。

赤ずきんは嬉しくなって笑った。

銀も、困ったように笑った。

——やっぱり銀ちゃんだ。

そう思った。

だから、そのときは気にしなかった。

銀がそれから、以前のように赤ずきんの頭巾をぐしゃぐしゃにしなくなったことも。

歩くとき、ほんの少しだけ距離を空けるようになったことも。

手を繋げば、変わらず握り返してくれる。

危ないところでは、いつも通り助けてくれる。

話せば笑ってくれる。

何も変わっていないはずなのに。

それでも時々。

赤ずきんが近づくと、銀はほんの一瞬だけ黙るようになった。

理由を聞いても、

「なんでもありませんよ」

いつもの笑顔で、そう答えるだけだった。

だから赤ずきんも、それ以上は聞かなかった。

銀ちゃんは、大人になったのだ。

きつと、それだけなのだと思つた。

* * *

さらに一年。

「銀ちゃん！」

「走ると転びますよ」

「転ばないわ！」

「あなたの大丈夫は信用できません」

「またその喋り方！」

「もう慣れてください」

「いやよ」

「……どうしてです？」

「だって、銀ちゃんが遠くなったみたいなんだから」

「……………」

銀の足が止まった。

「銀ちゃん？」

「……俺は」

何かを言いかけて、銀は口を閉じた。

それから、いつものように微笑む。

「どこにも行ってませんよ」

「でも一年に一回しか帰ってこないじゃない」

「それは……」

「だから、帰ってきたときくらい、いつもの銀ちゃんがいいの」

「……………」

銀はしばらく黙っていた。

やがて、諦めたように顔に手をあてて天を仰ぐ。

「……ほんと、面倒くせえな。お前」

「ふふっ」

「なんで笑うんだよ」

「銀ちゃんだから」

「……………」

その言葉に、銀はまた黙った。

最近の銀は、時々こうなる。

赤ずきんには、その理由が分からなかった。

でも——その年も帰る日まで、銀はずっと赤ずきんのそばにいた。

* * *

やがて。

赤ずきんも、十六になった。

「あの狼、また手柄を立てたらしいぞ」

いつものように怪我をこしらえて薬を取りに来た若い熊の獣人が、思い出したように言った。

「銀ちゃん？」

「ああ。たぶんな」

「熊さん、銀ちゃんのこと知ってるの？」

「直接は知らねえよ。昔の傭兵仲間から聞いただけだ」

「そうなの？」

「銀色の髪に金の目。若い狼で、綺麗な顔してるって話だ。お前のところに来る奴と同じだろ」
赤ずきんの顔が、ぱっと明るくなった。

「銀ちゃんだ！」

「……たぶんな」

「どんな手柄？」

「そこ食いつくのかよ」

「だって、銀ちゃんの話でしょう？」

嬉しそうに身を乗り出す。

熊は呆れたように息を吐いた。

「戦がえげつなく上手いらしい。正面からぶつからずに相手を動かして、気づいた時には逃げ道がなくなってる。はつきり言つて嫌な戦い方だぜ」

「ふふ。銀ちゃん、すごい」

「……………」

「昔から頭がいいの」

「……お前、話聞いてたか？」

「聞いてたよ？」

にここにこと笑っている。

熊はしばらくその顔を見ていたが、やがて諦めたように頭を掻いた。

「……まあいい」

そして、ふと思ひ出したように続けた。

「あれだけ出世すりゃ、他の貴族連中も放つとかねえだろうな」

「？」

「婚約の話があるらしいぞ」

「……婚約……？」

「今までは見合いなんか全部蹴ってたらしいけどな」

「……そうなの？」

「ああ。だが今回は違うらしい」

「え？」

「ある貴族の娘と、ここ最近何度も会ってるって話だ。今まで全部断ってた男が、だぞ」

——あ。

不意に、分かった気がした。

いつからだっただろう。

銀ちゃんが、私に少しでも距離をあけるようになったのは。昔みたいに頭巾をぐしゃぐしゃにされることもなくなつた。抱きつけば、優しく離されるようになった。

話し方も変わった。

少しずつ、大人になつて。

少しずつ、自分から遠くなつていった。

——そっか。

銀ちゃん、むこうで好きな人ができたんだ……。

「銀ちゃん、お嫁さんもうんだね」

ちゃんと笑つたつもりだつた。

けれど、胸の奥が痛かつた。

(中略)

そして、ある日――。

朝から降り始めた雪は、昼を過ぎるころには森を真っ白に染めていた。

「すごい雪……」

赤ずきんは窓の外を覗いた。

木々の枝にも、赤い屋根にも、こんもりと雪が積もっている。

こんな日は、さすがに誰も葉を取りには来ないだろう。

そう思っていた、そのとき。

――ドンドンドン！

「赤ずきん！ いるか！」

「……熊さん？」

慌てて扉を開ける。

「うわっ！」

冷たい風と一緒に雪が舞い込んできた。

そこには、頭から肩まで雪まみれになった大きな熊の獣人が立っていた。

「どうしたの!？」

「悪い。葉を切らしちまってな」

「こんな雪の中を？」

「ああ。来たときは、ここまで降ってなかったんだがな」

熊が頭を振る。

ばさばさと雪が落ちた。

「ちよつと待ってて。すぐ持ってくるから」

そう言つて家へ戻りかけて——赤ずきんは振り返つた。

熊の肩にも、髪にも、まだ雪が積もっている。

「……寒いでしょう？」

「まあな」

「入って」

「いいのか？」

「もちろん」

そう答えた、そのとき。

ふと、ずつと昔に聞いた声が、頭の中によみがえった。

『――赤ずきん。あんたは人を信用しすぎるところがある』

まだ師匠が元気だったころ。

あれは確か、赤ずきんが十四になった年だった。

『森のみんなを疑えとは言わないわ。でもね、赤ずきん。いい人だからって、何もかも信用していいわけじゃないの』

そして。

『少しくらいは、自分で自分を守ることも覚えなさい』

『うん』

『じゃあ、行ってくるわね。……ああ、それから』

出かけようとしていた師匠が、振り返った。

『熊を家に入れちゃ駄目よ』

『熊さん？ どうして？』

『なんでもよ』

それから少し考えて。

『……狼も』

『銀ちゃんも？』

『……………』

師匠はなんとも言えない顔をした。

『まあ、あれは余程のことがない限り大丈夫だとは思うけど……』
なぜだろう。

今になって、そんな言葉を思い出した。

『……………』

「赤ずきん？」

「……………うん。なんでもない」

赤ずきんは笑った。

だって、熊さんだもの。

知らない人ではない。

何度も葉を取りに来ているし、師匠が亡くなってからは、薪を割ってくれたり、何かといつも様子を見に来てくれる。

「早く入って。風邪ひいちゃう」

「獣人はこんなじゃ風邪引かねえよ」

熊は笑いながら家へ入った。

——ばたん。

扉が閉まった。

「はい。これ」

「助かった」

赤ずきんが差し出した薬瓶を、熊の大きな手が受け取る。

「一日二回ね」

「ああ」

「今度はなくなる前に来てね。こんな雪の日に来たら危ないもの」

「はは。お前は相変わらずだな」

「なにが？」

「いや」

熊は薬瓶を鞆へしまった。これで帰るのだと思った。

「……………」

けれど熊は動かなかった。

「熊さん？」

「なあ、赤ずきん」

「なに？」

「お前、もう十八だったよな」

43 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

「うん」

「……………」

熊が、じつと赤ずきんを見る。

いつもと何かが違う。そう思ったのは、なぜだろう。

なんとなく落ち着かなくなつて、赤ずきんは空いた薬瓶を片づけ始めた。

「どうしたの？」

「いや……………」

すん、と。

熊の鼻が動いた。

「……………やつぱりするな」

「え？」

「狼の匂い」

赤ずきんは目を瞬いた。

「狼？」

「お前からずつとする」

「私から？」

「ああ」

熊の視線が、赤ずきんの胸元へ落ちる。

「それだろ」

「あ……」

赤ずきんは首から下げたお守りを取り出した。

古びた革紐。

その中に編み込まれた、銀色の毛。

「これ、銀ちゃんにもらったの」

「……やつぱり、あの狼か」

熊は少し眉を寄せた。

「しかし……まだ持ってたのか、それ」

「もちろん。大切なものだもの」

「……………」

「？」

もう一度、熊の鼻が動く。

「…………なるほどな」

「なに？」

「いや。あの狼も、随分しつこいことすると思ってな」

「しつこい？」

「お前、意味分かってつけてんのか？」

赤ずきんは不思議そうにお守りを見た。

「お守りでしょう？」

「……………」

熊は黙った。

それから、低く笑った。

「そうかよ」

「？」

「なら聞くが」

熊が一步近づく。

「お前、狼の番なのか？」

「……つがい？」

「嫁だよ」

「えっ」

胸の奥が、ちくりと痛んだ。

「違うわ」

「だよな」

「うん。銀ちゃんは……」

少しだけ、言葉に詰まる。

「お兄ちゃんみたいなのだから」

「……兄？」

「うん」

熊はしばらく赤ずきんを見ていた。

その目が、ゆつくり細くなる。

「なら——俺でもいいってことか」

「……え？」

赤ずきんが顔を上げる。

熊は、笑っていなかった。

「熊さん？」

「赤ずきん」

大きな手が伸びてきた。

いつものように、頭を撫でられるのだと思った。

けれど、その手は頬の横を通り過ぎ——肩へ回った。

「……え？」

ぐい、と引き寄せられる。

「きゃっ」

目の前が、大きな胸でいっぱいになった。

「く、熊さん？」

「……小せえな、お前」

「なにが？」

「全部」

「もう。私、そんなに小さくないわ」

「俺から見りゃ小さい」

頭の上から、低い声が落ちてくる。

いつもなら笑って返せたはずなのに。今日は、なぜか笑えなかった。

近い。それに――。

銀ちゃんと、違う。

同じ獣人なのに。身体の大きさも。匂いも。自分を抱く腕の力も。

何もかもが違う。

「……熊さん？」

身体を離そうとする。

けれど、熊の腕はすぐには緩まなかった。

「お前、俺のところに来いよ」

「……え？」

「俺は、お前がこんな森で一人にいるのが心配なんだよ」

「熊さん……」

「魔女が死んでから、ずっと一人だろ」

「でも私、ちゃんと——」

「分かってる」

熊が言葉を遮る。

「葉も作ってる。飯も食ってる。家のことだつて一人でやってる」

大きな手が、ぽん、と赤ずきんの頭に乗った。

それは、いつもの熊の手だった。

「それでも心配なんだよ」

「……………」

「俺なら、お前一人くらい守ってやれる」

その言葉は、少しだけ、嬉しかった。

師匠がいなくなつてから、誰かにそんなふうに言われたのは、初めてだったから。

「それに、お前にとつても悪い話じゃねえと思うぞ」

「……………」

「想像してみろよ」

熊が笑つた。

「お前は俺の嫁になる。二人で暮らして、そのうち子どもができる」

赤ずきんは言葉を失つた。俺のところに来いとは言われたが、それが求婚されているとは思つていなかったから。

「こ、子ども？」

「ああ。三人くらいいいな」

「三人!？」

「賑やかでいいだろ」

「そんな、急に言われても……」

「お前と俺の子なら、きつと可愛い」

あまりにも当然のように言うものだから一瞬、本当にそんな未来があるような気がした。
暖かな家。家族。笑い声。もう、一人ではない暮らし。

けれど……。

「……私」

胸の奥に浮かんだのは。

銀色の髪だった。

「熊さんのことは、好きだけど……」

「……………」

「そういう好きなのかは、分からないの」

熊の目が細くなった。

「……狼か？」

「え……」

「お前、あいつの話になると顔が違う」

「……………」

「帰ってもこない男を、いつまで待つつもりだ」

「待ってなんか……」

「二年だぞ」

「……………」

「魔女が死んだときだって、結局あいつはいなかった」

「それは……」

「赤ずきんは慌てて顔を上げた。」

「銀ちゃんは知らないから。お師匠様が、森の外には知らせちゃいけないって——」

「分かっている」

「……え？」

「だから何だよ」

熊の声が低くなる。

「お前が一番つらかったとき、あいつがここにいなかったことは変わらねえだろ」

「……………」

「俺はいた」

肩を抱く腕に、僅かに力がこもる。

「この一年、お前が一人で暮らしてるのも見てた」

「熊さん……痛いわ」

「それなのに、いつまで帰ってこない男のために空けとくつもりだ」

「だから、待ってなんか——」

「あの狼は危険だ。やめとけ」

「銀ちゃんを悪く言わないで！ とても優しい人よ」

「優しい？」

熊が喉の奥で笑った。

細められた目には、静かな凶暴さが湛えられていた。

「そうか。だったら……優しい狼ほど怖いぞ」

「どうして？」

「あいづらはな、欲しいもんが決まったら手段を選ばねえ」

熊の声が低くなる。

「待つのも、騙すのも、利用するのも平気でやる。必要なら何年だって待つ」

「……何年も？」

「ああ」

熊が目を細めた。

「そうして、獲物が弱った瞬間を見逃さねえ」

「銀ちゃんは、そんな人じゃないわ」

「だから心配なんだよ」

熊が赤ずきんを見た。

「お前みたいなのは、自分が喰われるまで気づかねえからな」

「なに言ってるの。そんなわけじゃないじゃない。もう、離して……」

「例の婚約者の女——どうやら、この森の所有者らしいぜ」

「……森の？」

「ああ。結婚の話はかなり進んでるらしい。お前にそんなもん持たせといてな。今頃、向こうでよろしくやってんじゃねえのか」

胸が。

ずきん、と痛んだ。

「……っ」

「おい」

赤ずきんは俯いた。

ぼたり。

涙が落ちる。

「……赤ずきん」

「分かってるわ……」

「……………」

「銀ちゃんは、もう帰ってこないかもしれないって……」
声が震える。

「私だって……本当は、分かってる……」

「……………」

熊の顔から、陰しさが消えた。

「……悪かった」

ぎゅ、と。

大きな腕に包まれる。

「泣かせるつもりじゃなかった」

「……………」

背中を、大きな手がゆっくり撫でる。

赤ずきんも抵抗しなかった。

ただ、慰めてくれているのだと思った。

けれど――。

「……………」

熊の手が、止まった。

「…………お前、柔らけえな」

「え？」

抱く腕に、少しだけ力がこもる。

「熊さん？」

すん、と。

髪近くで、熊が息を吸った。

「…………それに、いい匂いする」

「……………」

「前から思ってたんだ」

もう一度。

今度は、首元へ鼻先が近づく。

「この甘い匂い、ずっと近くで嗅いでみたかった」
「……熊さん」

(中略)

銀ちゃんが帰ってきた。

もういなくならないって言っている。

わかつてる。お嫁さんがいる。それでも、銀ちゃんは帰ってきてくれた。
赤ずきんは胸がいっぱいになった。

今、この時だけは喜びを噛み締めた。
そう思った。

——そのとき。

赤ずきんを抱いていた銀の身体が、僅かに止まった。

「……赤ずきん」

「なあに？」

「今日」

銀の、低い声が頭上から落ちる。

「誰か、この家へ来ました？」

「え？」

赤ずきんは顔を上げた。

「どうして？」

「答えてください」

「……熊さんが来たけど」

腕が止まった。

「……………熊？」

「うん。葉がなくなっただって」

「この雪の中を？」

「そうなの。雪まみれだったから、中に――」

「入れたんですか」

「……うん」

「……………」

赤ずきんを抱いていた腕が、少し強くなる。

「……銀ちゃん？」

赤ずきんが訝しむ。

「ちよつと、苦しい……」

「……あなたから……熊の匂いがする」

「え？」

金色の瞳が、赤ずきんを見下ろした。

さつきまでと違う。

暗い。静かな目だった。

61 俺の赤ずきん、あの時の約束もらいにきた。【体験版】

「それも、随分と、濃い」

「銀ちゃん……？」

銀の視線が、首元へ落ちて、そこで止まった。

「……お守りは？」

あ……という顔をして、赤ずきんが俯く。

「……………」

「赤ずきん」

「ごめんなさい……」

「どこです」

銀の軍服を一瞬ぎゅつと強く握る。

「燃えちゃったの」

「……………」

短い沈黙。

「どうして？」

「熊さんが……」

銀の耳が、ピクリと動く。

「……………熊が？」

冷たくて、低い声。

「違うの。熊さんが燃やしたんじゃない、私が逃げようとして――」

「逃げた？」

「……………」

「何から？」

赤ずきんは口を閉じた。

銀の顔が、怖かった。

「……………赤ずきん」

「熊さんが……………今日は、少し変だったの」

「何をされた」

「な、何も……………」

「何をされた」

同じ言葉だった。

けれど二度目は、問いかけではなかった。

「……抱き、しめられて」

赤ずきんは目を彷徨わす。

「……………」

「匂いを……嗅がれて」

思い出した赤ずきんは、小さくふるりと震えた。

頭の上で、ぎり、と硬いものが擦れる音がした。

「それから？」

「……………」

「赤ずきん」

銀の声が恐ろしかった。

赤ずきんは小さく、答えた。

「……口づけ、しようとされて……」

びたり。

銀が止まった。

「でも、してないわ。ちゃんと、嫌って言ったの」

「……………」

「私、熊さんが怖くなつて。それで逃げようとして、お守りが、切れて……暖炉に……」

銀は黙って聞いていた。

怒鳴らない。表情さえほとんど変わらない。

なのに、赤ずきんは、熊に迫られたときとは違う恐怖を感じた。

「銀ちゃん……………」

「それだけですか」

「……え？」

「熊があなたにしたことは、それだけかと聞いています」

「え、ええ………」

「……………」

長い沈黙。

やがて銀が、ゆっくり息を吐いた。

「……そうですか」

低い。

聞いたことのない声だった。

（中略）

赤ずきんは銀に導かれるまま、寝台へ横になった。

いつもなら安心できる場所なのに、今夜はまるで知らない場所のようだった。

銀は何も言わず、そんな赤ずきんを見下ろしている。

視線が、熱い。

まだ指一本触れられていない。

それなのに、肌が熱くなっていく。

カチャリ。

銀が軍服の金具を外した。

外套が床へ落ち、襟元が開いていく。

その間も、金色の瞳は赤ずきんから離れない。

まるで、獲物を狙う狼のように。

開いた襟元から太い首筋が覗いて、喉仏がゆつくりと上下する。

その下へ続く鎖骨まで見えそうになって、赤ずきんは慌てて顔を逸らした。

「あ、あの……私、やつぱり……」

たまらず身体を起こそうとした、そのとき。

ぎしり、と寝台が軋んだ。

肩に大きな手を置かれ、身体を寝台へ戻される。

そのまま銀の膝が腰の両側へ沈み、大きな影が赤ずきんを覆った。

「……っ」

こんなにも、身体大きさが違う。

覆われただけで、息が浅くなる。

銀は何も言わなかった。

ただ自分の片方の手袋へ指をかけ、黒革を引き抜いていく。

「……それ……」

手の甲に、狼がいた。

黒く刻まれた、狼の紋章。

少年だった銀の身体には、なかったもの。

「……ああ、これか？」

銀の指先が、黒い狼の輪郭をゆつくりと辿る。

「俺の父親の家の紋章だ」

「……銀ちゃん、貴族だったの？」

「一応な」

胸が、ズキリと痛んだ。

やっぱり。熊さんの話は本当だった。

なら、貴族のお嬢様との話も――。

「赤ずきん」

思考を断ち切るように名前を呼ばれた。

「今、俺以外のことを考えるな」

「……………」

胸が詰まった。聞きたいことがあるのに、聞くのが――怖い。

「お前は何も知らなくていい」

「……………え？」

「何も」

銀が身を屈め、赤ずきんの髪を指に絡めた。そのまま頬へ触れる。

「森の外のことも、俺が向こうで何をしてきたのかも。お前には関係ない」

「……っ、でも……」

「必要になれば、俺が決める。必要なものは、俺が与える」

まるで、それが当たり前のことのように。

「だから、お前はここにいればいい」

「……ここ？」

「俺のそばに」

「……っ、銀ちゃんは……本当の家へは、帰らなくていいの……？」

銀が眉を顰める。

「ああ……たまに顔を出せばいい」

ズキリ、と胸が痛んだ。

「……泣くな」

「泣いて、ない……」

銀はそれ以上聞かなかつた。

頬に触れていた手で、そのまま顎を捉えられ上を向かされる。

「銀ちゃ——」

銀の唇の奥に覗いた鋭い牙。

次の瞬間、唇を塞がれた。

「……っ！」

食べられる。

そう思うほど、飢えた口づけだった。

「んっ……」

銀ちゃんの熱い口の中に唇を食べられる。

一度では足りず、角度を変えて、また奪われる。嚙猛な口づけ。

「んっ……銀、ちゃ……っ」

たまらず顔を背けても、顎を捉えた手が逃がさない。銀の胸を押しても、びくともしなかった。ぬるっ、と。

男の舌が、強引にねじ込まれる。

「っ……んん！」

男の熱くて太い舌に追われ、舌を絡め取られ、唾液を吸われる。

くちゅ、くちゅ……。

上に乗った男に両手で頭から顔全体を固定されて、身体も顔も動かせない状態で、男の満足ゆくまで口の中を貪られる。

脚にぎゅうつと力が入る。

涙が目尻を伝った。

銀は名残惜しそうに最後に赤ずきんの唇を一周舐めて、下唇を噛んで離れた。

はあ……。

吐息が混ざり合う。

すぐ目の前で、ぎらついた雄の目。

ぞくり。

銀のこんな目を、初めて見た。男の、炎のような欲望。

脈が跳ね、喉がからからに渴く。

銀が顔を寄せてくる。熱い舌で、伝った涙を舐め取られ、そのまま頬から顎、首筋へと唇を落

としていく。身を引いても、そのぶんだけ追ってくる。

「まっ……て」

降りそそぐ熱い口づけに耐えきれず、赤ずきさんは銀の口元を両手で押さえた。

「銀ちゃん、やだ」

びたり。

銀が止まった。

安堵したのも束の間、銀がわずかに顔を傾ける。

ぺろり。

「……っ！」

手のひらを舐められ、びくりと引く。その手首を、一瞬のうちに捕まえられた。

薬指へ唇が触れた。不意に、牙が食い込む。

「……あっ」

白い指に残った赤い歯形を、銀はじつと見ていた。

赤ずきさんは乾いた喉から言葉を絞り出した。

「……これ、が……銀ちゃんのそばに、いるってこと……なの？」

「ああ」

「これが、約束……？」

「ああ、そうだ。赤ずきん」

低く、揺るぎのない声。

大きな手が、腕を撫で下ろし、腰をなぞる。

そして、女の一番深い場所。そこを、雄の掌に押さえられた。

——子を宿す場所の皮膚の上を。

熱い。重い。

『ここまで、俺のものだ』と。

掌から伝わる意志が、皮膚を突き抜け、その下へ杭でも打ち込むように沈んでくる。

ぞくん、と本能が震えた。

肌に汗が滲む。

「……あ……」

湿気を含んだ声が漏れた。

銀の呼吸が、わずかに乱れた。

やがて手が離れ、その指が赤いベストの紐へかかった。

【※続きは本編にて】